

ハノイとハロン湾旅行

右城 猛

まえがき

平成 20 年 5 月 22 日(木)から 5 月 25 日(日)にかけて、よみうり海外ツアー「アオザイ香るハノイと世界遺産ハロン湾クルーズ 4 日間」に妻と娘の 3 人で参加した。

1 日目はハノイ市内のホテルに到着するだけ。

2 日目の午前中は、ハノイ市内でホー・チ・ミンの遺体が安置されているホーチミン廟(びょう)と蓮の花を模して作られた仏教寺「一柱寺」(いちちゅうじ)を観光し、シルク専門店ココシルクでショッピング。そしてベトナム最古の大学跡「文廟」(ぶんびょう)を観光してアオザイ専門店でショッピング。昼食はベトナム料理。その後、ベトナム陶器の村「バッチャン村」で陶磁器の製造工場を見学し、再びハノイ市内に帰ってきて旧市街を散策と伝統芸能「水上人形劇」の鑑賞。

3 日目は世界遺産「ハロン湾」のクルージング。

最後の日は帰るだけという 2 泊 4 日のショート旅行である。ショート旅行といっても観光エリアがあまり広くなかったので、比較的のんびりした旅行であった。



ベトナムの地図

関空からハノイへ

5 月 22 日(木) 18:40 発の JL755 便で関西空港を出発。ハノイ国際空港に着いたのは日本時間で 23 時 45 分。現地時間は 21 時 45 分。フライト時間は約 5 時間。時差は 2 時間。

ハノイ国際空港(ノイバイ国際空港)は、ハノイ市街部から北に約 45km 離れた場所にある。荷物を受け取って到着ロビーに出ると、現地ガイドのラム(漢字名では林)さんが待っていてくれた。バスで、ATS ホテルに向かう。

バスの中でのラムさんの話ではじめてツアー参加者が 26 名であることを知る。札幌、福井、仙台、和歌山、大阪、京都、岡山など全国各地から集まっていた。四国からは我が家の 3 人のみ。23 名は女性。ほとんどが 50~60 歳代と思われるにぎやかなおばさんたち。

空港からハノイ市内に向かう途中に Canon, Panasonic, Yamaha などの文字が書かれた看板が目に入る。最近できた工業団地で、98%が日本企業。

ホン河(紅河, Song Hong)に架かるロンビエン橋を渡ればハノイ市内。ホン河は中国雲南省から発している川で、水中に含まれる酸化鉄のため水の色が赤い。このため紅河とも呼ばれている。

ハノイは漢字で河内と書く。八(河)ノイ(内)。高知も昔は「河中山」(こうちやま)と呼ばれていた。それが高智山、高智と転化して高知と呼ばれるようになった。ハノイと高知はよく似ている。姉妹都市になっても良いのではないだろうか。

ATS ホテル

私たちが宿泊したのはハノイ旧市街のホン河の近くに位置している ATS ホテルであった。近くにはオペラ劇場やヒルトンホテルがある。

空港から ATS ホテルに着いたのは現地時間で 20 時 25 分。二ツ星のホテル。宿泊料金をネット



ハノイ市内地図

で調べると 44 ドル。五ツ星のヒルトンホテルは 230 ドル。約 1/5 の値段。

風呂の湯や水洗トイレの水の出が悪い。海外に出ると日本の水道技術の高さを改めて知らされる。蛇口をひねると当たり前のように水やお湯がジャー、ジャーと出るのは日本くらい。

朝食は 6 時半からであったので、その時間に行くとまだ準備中。ビュッフェ方式の料理が出揃ったのは 6 時 45 分頃。時間に厳格でない。

24 日の朝、パソコンのスイッチを入れると無線ランが使えた。二ツ星のホテルでもインターネットが使えるのには驚いた。さっそく娘の和恵にメールを送ってみる。すると直ぐに返事が返ってきた。インターネットがあれば、世界中のどこにいても日本の会社にいるのと同じ環境で仕事がで

きることを体験した。

ラムさんにベトナムにおけるインターネットの普及状況を尋ねると、一般にはまだ普及していないが、4 つ星以上のホテルであれば無線ランが使えるとのことであった。

二ツ星ホテルなので、一流ホテルのような豪華な料理ではなかったが、フォーは美味しかった。コシのない米麺に鶏や牛から出汁を取った透明なあっさりしたスープをかけたうどんのようなもの。ベトナムでは高級レストランから街角の屋台までフォーを作っており、朝夜昼の 3 食すべて食べるほど生活に密着した食べ物。讃岐うどんのような存在である。

フランスパンに似たベトナムパンも美味しい。ベトナムは昔フランスの支配下にあったことが



二泊した ATS ホテル



ホテルの部屋の窓から眺めた外の景色



ATS ホテルの朝食



フォー

から、フランスパンの影響を受けている。ベトナムパンは路上で売られていた。ベトナム産のコーヒーも独特の香りがあったとても美味しい。

一柱寺とホーチミン廟

ATS ホテルを9時に出発。専用バスの車窓からハノイ市内を見物しながら約50分走るとハノイ市西部にあるホーチミン博物館に着いた。この博物館は1990年にホーチミン生誕100周年を記念してソ連の援助によって建てられたもの。

徒歩によって博物館、一柱寺、ホーチミン廟を見学する。ホーチミン博物館、ホーチミン廟の建物は外から眺めるだけ。

ハノイ市内の街路樹には、真っ赤な花びらを付けたものと、紫色の花を付けた樹があった。真っ赤な花のある樹は火炎樹で原産地はアフリカのマダガスカル。紫の花を付けているのはバンランで、原産地は中国の雲南省。いずれも仏領インドシナ時代に持ち込まれたものである。

火炎樹が咲く季節は卒業式シーズンと重なるので、火炎樹の花は「卒業式の花」とも呼ばれているようである。卒業式の白いアオザイに真っ赤な火炎樹の花はよく似合うに違いない。

ホーチミン博物館の敷地にも、火炎樹とバンランの花が咲き誇っていた。

ホーチミン博物館から歩いて一柱寺に向かう途中には、ジャックフルーツやマンゴーの木があった。



火炎樹が咲いたホーチミン博物館の入り口



マンゴー



バンランの花



ホーチミン博物館



ジャックフルーツ



一柱寺

一柱寺は、蓮の花が浮かぶ池の上に1本の柱だけで立っている珍しいお寺。蓮の花を模して11世紀の半ばに造られたもの。

蓮の池の奥には菩提樹が植えられていて、その樹の前にはお釈迦様の像が祀られている。お釈迦様の生誕地ルンピニで見た光景とよく似ている。

蓮の池の周りには白い花びらを付けた樹が植えられていた。プルメリアである。ハワイではレイに使われている。日本語ではインド素馨(そけい)と呼ぶ。寺院のそばに植えられることからテンプルトリーとも呼ばれている。

一柱寺のすぐ近くにはホーチミン廟がある。ベトナムの民族的英雄であるホーチミン主席の遺体を冷凍してガラスケースに納めて安置している場所。

入り口には二人の衛兵が立っている。1~2時間おきに交代するようであるが、微動だじしない。ホーチミン廟の前の広場は広大。まるで中国の天安門広場のよう。



菩提樹と仏陀像



蓮池の周りのプルメリア



ホーチミン廟の前の広場



門の入り口に立つ衛兵



HO-CHI MINH の文字はベトナム産の赤ルビー



ベトナム軍隊の行進



かわいい幼稚園児の行進

文廟(ぶんびょう)

文廟は境内にベトナムで最初の大学「国子監」が開設された場所。門を潜って中に入ると、屋根に鯉の彫刻施された赤い瓦屋根の門が立っている。さらにその門を潜っていくと孔子の霊を祀った建物がある。これが文廟。孔子廟とも言う。文廟の屋根の上には龍の彫刻がある。登竜門を意味している。

人の立身出世の関門を「登竜門」というが、これは黄河上流にある竜門山を切り開いてできた急流「竜門」を登り切った鯉は龍になるという言い伝えに由来している。

文廟の前庭の両側には、19世紀に建てられた「奎文閣」があり、亀を型取った台座の上に置かれる82の石碑には科挙試験(官吏登用試験)合格者の名前が刻まれている。亀の頭を撫でると賢くなると言われている。

文廟には孔子と4人の弟子の像が祀られている。

日本で怖いもの代表は「地震,雷,火事,親父」。ベトナムでは「洪水,火事,神学者,無知」だそうである。勉強していない無知な人間は怖いということだろうか。



最初の間



文廟と前庭



文廟の入り口



文廟の屋根の竜



最初の間)の屋根に飾られている彫刻



奎文閣



亀の台座に乗った石碑



文廟の中の孔子の像



純白のアオザイを着た女子学生



文廟の中でモデルの写真撮影が行われていた

純白のアオザイを着た女子学生を見かける。ベトナムの高校や大学では、純白のアオザイ女子生徒・女子学生の制服に採用しているところが多いようである。

バッチャン村

バッチャン村はベトナムで1番の陶器の町。町中に陶器の店や工場が並んでいる。ハノイ市内から車で約40分、南東約12キロのところにある。道中は、アスファルト舗装はしてあるものの途中からテコボコ道。旅の疲れで熟睡していたが、衝撃で目が覚めた。

見学した工場では、若い娘が絵付け作業をしていた。下書きなしで器用に模様を筆で書いていた。ツアーの同行者の中には、手の平や、Tシャツ、バッグなど模様を描いてもらっていた人が数名いた。彼女たちから進んで描いてくれたようである。

バッチャン焼は、表面に幾筋もの貫入が入り、赤や青で彩色されている。ベトナムお土産の定番となっている。手作業なのでどれ一つとして同じ模様はない。



筆を使って手作業で絵付けがされている。



水上人形劇

水上人形劇は 1000 年も昔から伝わる民族芸能。収穫の祭りのときに農民が村の池や湖を舞台に演じていた。日本の神楽のようなもの。

タンロン劇場は、元々はホーチミン主席が子供たちのために建てた劇場。ハノイ旧市街の中心部に位置するホアンコム湖の北側の縁にある。タンロン水上人形劇場では毎日六回、国立人形劇団の 60 人によって水上人形劇が公演されている。

舞台正面には寺院風の建物が置かれ、左手には太鼓やフエや一弦琴の演奏者や語り手が控えている。民族楽器の演奏に合わせて、3~5 分程度の短劇が演じられる。舞台に置かれた建物の下部に「すだれ」があり、その陰から筒の先につながったからくり人形を操作するのである。

最後に人形使い全員があいさつに出てきた。人間の大きさと比べると人形の大きさはかなり大きい。これを棒の先で操るのはかなりの体力、それに練習が必要である。しかも水の中に入って操るのだから大変である。



凱旋帰郷



最後に人形を操る様子を公開する



劇団員のカーテンコール

ハノイ市内

ハノイ市内は自動車、バイク、自転車、シクロ、歩行者が混在している。90cc~110cc の中型バイクが多い。日本製、中国製、韓国製が走っているが、日本製が 50% を占めているようである。大体は二人乗り。交通違反ではあるが 3 人乗り、4 人乗りも見られる。庶民の乗り物はバイクが主体のようである。

菅笠(すげがさ)をかぶり天秤棒を担いだ物売りの女性、荷物を頭に載せて運んでいる女性、シクロに乗った観光客が目立った。四国遍路で被る笠が菅笠。竹やヒノキで編んだ傘。

自動車はベンツ、日本車が走っている。ネパールやバリ島は日本では廃車になっているような中古車がほとんどであったが、ハノイでは日本のように新しい車ばかりであったのは意外。税金の関係のようである。

クラクションの音がうるさいのは、ネパールとよく似ている。

街の中には電線が目立つ。美観を損ねている。ベトナムの勤務時間は 8 時 30 分から 5 時半。残業はしない。昼食は自宅に帰って 2 時間くらいかけて食べるそうである。朝食は外食が多い。店頭の路上で脚の短い椅子に座って食べている。

ハノイの旧市街は別名 36 通りとも呼ばれている。以前城下町だったこのエリアは、職人達が村々から集められ職業別に通り毎に分かれて住んだ。



客待ちをしているバイクタクシーの運転手



市内はバイクが多い



駐輪場ならぬ駐バイク場



シクロで観光するは白人



ベトナムシルクで有名なココシルク店。ベトナム記念に二本のネクタイを買う。一本は娘婿の朋男への土産用。怜佳はサンダルを買う。



アオザイ ハノイ ショッピングセンター
アオザイやお菓子などの土産物売る店。ここでは、ジャックフルーツで造った菓子などを土産用として買う。ベトナムは物価が高い。



アオザイ店で休憩



菅笠を被り天秤棒を担いだ野菜売り



カウゴー通りの靴店



日本のリヤカーとは逆向きに走る



水上人形劇の近くの鞆店



荷物を頭に載せて運ぶ女性



荷物を頭に載せて運ぶ女性



菅笠を被った花売り



ハノイにある唯一の横断歩道橋



ホアンキエム湖の島に渡るフク橋



屋台



ホアンキエム湖近くの戦没者記念像



屋台



旧市街には電線が多い

ハノイからハロン湾への往路の風景
 二日目の観光地は今回の旅行のメインであるハロン湾。ハノイからハロン湾までは、途中の休憩も入れてバスで4時間の距離である。
 8時15分にホテルを出発。ハロン湾に向けてバスで東に走る。
 菅笠を被って路上でベトナムパンを売る女性をたくさん見かけた。ハノイでパン屋がないのだろうか。



ハイウェイの料金所



菅笠を被って路上でベトナムパンを売る女性



ハイウェイの料金所



屋台で朝食を食べる人々



日本の昔のような田園風景



日本のODAによるハイウェイの建設



天秤棒を担いで荷物を運ぶ農夫



煙突がある建物はレンガ工場

Humanity Center 人道支援センター -
ハノイとハロン湾のほぼ中間に位置するところで「ヒューマニティ・センター」(Hong Ngoc Humanity Center)に立ち寄る。

ここは、国際機関の援助で設立された戦争孤児や枯葉剤の影響で正常な身体に成長しなかった子供たち(ハンディキャップドチルドレン)のための職業訓練所を兼ねた土産物店。たくさんの子供達が刺繍をしたり、アオザイを仕立てたりして働いている。

ハロン湾に行く観光場バスはトイレ休憩を兼ねて必ずここに立ち寄ることになっている。

店内には宝飾品、衣類、土産品、食品など数多くの品々が展示販売されている。店の一角には刺繍の作業場があり、数十名の女子職人たちが刺繍を縫っている。ここで働く人たちは、みんな身障者。商品の売り上げ収入が彼らを支えている。

記念に刺繍で描いた絵を、70ドルで買った。人物を白黒写真のように描いた刺繍が見事な出来映えであったので、本当はそれを買いたがったのであるが1500ドルほどしたので諦めた。



刺繍を縫う身障者



車椅子で作業をする身障者



アクセサリーも売っている

ハロン湾クルーズ

ハロン湾の乗船場に到着したのは12時15分。ホテル出発から4時間かかっている。乗船場には世界各国からの観光客が詰めかけ、都会のラッシュアワーのような混雑ぶりであった。さすが世界遺産である。

ちなみに、ベトナムへの観光客数の1位は中国で、欧米、日本、韓国と続くようである。



乗船場は観光客で混雑

ハロン湾には大小 3,000 もの奇岩，島々が存在する。中国の桂林に似ていることから「海の桂林」とも呼ばれている。1994 年にユネスコの世界遺産（自然遺産）指定された。

ハロンという地名の由来は、中国の侵略に悩まされていたその昔，龍の親子が舞い降りて外敵を打ち破り，その際に吐き出した宝の玉が無数の岩に変化したという伝説に基づいて，ハ＝降りる，ロン＝龍，つまり「降龍」の意味をもつハ・ロンとなったとされる。

地質学的には北は桂林から南はニンビンまでの広大な石灰岩台地の一角である。石灰岩台地が沈降し風化作用によって削られ，現在の姿となったとされている。

船溜まりにはものすごい数のジャンク船が係留されている。ジャンク船とは，中国で古くから用いられてきた木造帆船のこと。

ハロン湾クル－ズには，3 時間コースから，ジャンク船に寝泊まりしながらカヤックを楽しんだりする 2 泊 3 日のクル－ズもある。私たちのクル－ズは 3 時間コ－ス。ハロン湾のハイライトコ－スの周遊と水上マーケットに立ち寄るだけ。



港に繫留された多くのジャンク船



12時20分，棧橋からジャンク船に乗り込む



棧橋から乗り込んだ船からツアーでチャーターしている別のジャンク船に移る。



早速白ワインを注文し，私の 58 歳の誕生日をワインで乾杯。最初の料理はエビを油で炒めた料理



エビ殻をむいた指をボールに入った水で洗う



次の料理は蛤の酒蒸し



その後、ワタリガニ、イカと野菜の炒め物、魚の丸ごとから揚げ 揚げ春巻き料理などがくる。



ジャンク船の後尾のデッキ



絶景コースの入り口。1列に並んで遊覧船が通る。



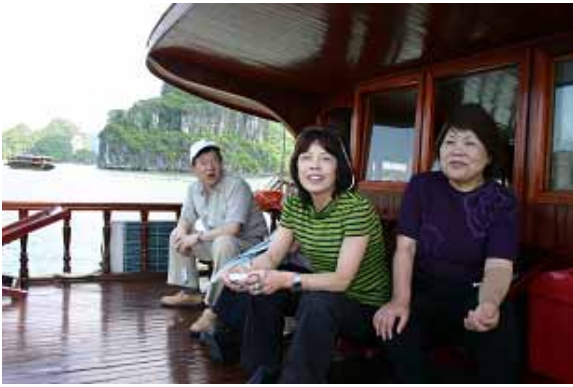
船の2階のオープンデッキ



ジャンク船の船長とツーショット



怜佳の横の若い男性は添乗員のラムさん



左は京都の杉本さん。女性は和歌山の二人組



船長室に入って船の操縦



前方に見える筏が水上マーケット

水上マーケットのいけすにはシャコエビや蛤など色々な魚介類がいた。購入すると船で料理をしてくれるとのことであったが、すでに海鮮料理で満腹なのでこれ以上は食べられない。



水上マーケットの筏に降りる



水上マーケットの筏に、小舟で果物を売りに来た。



大好きなランプータンとマンゴスティンを買う。
ビニール袋に一杯で3ドル。



水上マーケットに次々と観光船が接岸してきた



水上マーケットで買ったランプータンとマンゴ
スティンを船の中で食べる。



二羽の鶏が闘っているような闘鶏岩。雌鳥と雄鳥
が仲むつまじく向き合っているようにも見える。



船内では、給仕役の女性がハロン湾で養殖された
真珠のネックレスを売りに来た。最初 7000 円で
あったが、和歌山のおばさんたちの根切り交渉で
3000 円まで下がった。さすが、和歌山のおばさん。



午後3時乗船場に帰る。3時をすぎると栈橋はガラガラ。実質のクルーズ時間は2時間半程度。

ハロン湾からの帰路

ハロン湾を3時10分に出発。バスの車窓から
ベトナムの生活を観察しながらハノイに向かう。



レンガで建築中の住宅。地震があれば簡単に崩れるだろう。



レンガ工場の敷地にレンガが山と積まれている。高度経済成長で需要が多いのだろう。



陶器を売る店



ベトナム風を売る店



16時40分、トイレ休憩を兼ねて土産物店による。この店では、蓮茶、蓮の菓子、ブラジルコーヒーなどを売っているが高い。空港の免税店より倍近く高い。



蓮茶を試飲しながら添乗員のラムさんにベトナムのことをいろいろ教えて貰う。



このハイウェイのゲートを通過したところで私達の乗っていたバスの前輪がパンクした。タイヤは簡単に取り替えられるものと考えていたが、スペアタイヤの取り外しに予想外に手間取る。

この後、ハノイ市内で夕食をとり、空港に向かう予定であるので、時間が気にかかる。



バスの前輪のタイヤがパンク。スペアのタイヤが外れなくて四苦八苦。



皆さん、興味半分でパンを買う。1 個の値段は 30 円。



パンクの修理のためにバスを止めた付近では、反対車線の路上でベトナムパンが売られていた。パン売りの人は 15 人で、20m 間隔で並んでいた。バイクが止まって結構買っていた。



ツアー客がパンを買うのを見て、女性のパン売りも道路を横断してやって来た。



カゴにベトナムパンを入れて売っていた写真の男性が、道路を横断してパンを売りに来た。



18 時 40 分、やっとタイヤの取り付けが終わる。すでに日は落ちて暗くなりかけている。

最後の晚餐

19 時 10 分頃にハノイ市内の中華料理店「甲天下飯店」に着く。

琵琶や笛のようなベトナム楽器による演奏を

聴きながら、ベトナム最後の食事をする。私達のために、「上を向いて歩こう」、「故郷」など日本の歌が演奏された。

20時30分中華料理店を出発してハノイ国際空港に向かう。



ベトナムの伝統楽器による演奏



演奏が終わった後、グループ毎に奏者の前に並んで記念撮影。



バスのアクシデントに対するお詫びの意味と思うが、「読売旅行」からのドリンクのサービス。

コーヒー

ベトナムでコーヒーを飲んだのは、ホテルの朝食のときだけであったが、とても美味しいと感じた。

ベトナムは、世界第二位のコーヒー生産国。街のいたるところにカフェの看板があった。小さなアルミフィルターで一杯づつドリップするスタイル。フィルターと一緒に出されたカップにコーヒーが落ちるのを待ちながら至福の時の流れを愉しむのだそうである。

ベトナムの土産店や空港の免税店で売られているコーヒーは、Trung Nguyen 社(チュングエン社)のコーヒーである。空港の免税店で、下の写真左の値段が高いコーヒーを1袋と、写真右の5の数字が書かれたコーヒー2袋を買ってきた。



左のコーヒーは25ドル、右のコーヒーは6ドルであった。ハロン湾の帰りに寄った土産店では、右のコーヒーが1袋12ドルで売られていた。

ドル札を持っていなかったので日本円で支払うと、左のコーヒーが3000円、右のコーヒーが2袋で2000円であった。2625円と1260円(2×630)のはずであるが、釣り銭をくれないので高いコーヒーとなった。

インターネットで調べると、チュングエン社のコーヒーを日本ではダイソー(株)が販売代理店をしている。写真左は最高級タヌキコーヒー(レジェンディー)250gで、価格は2100円。写真右はNo.5 クリ・アラビカ 250gで価格は1300円であった。



No1 クリ・ロブスタ 250g 1,000円
No2 ロブスタ・アラビカ250g 1,000円



No3 アラビカ・セー250g 1,200円
No5 クリ・アラビカ250g 1,300円

ダイソー株式会社の HP による

通貨と物価

ベトナムの通貨はドンであるが、土産物店では米ドルでも表示されている。日本円での表示はないが、紙幣は使用できる。レートは、

1円=150ドン、1ドル=16,000ドン

ドンには両替しなかったが、ドルと円だけで事足りた。土産物店で見た商品の価格は、日本のスーパーマーケットよりもはるかに高い。観光客用の値段だろう。

ベトナム人の平均的な給料は、1.5~2万円/月。ハノイやホーチミンでは10~20万円/月の人もいて、貧富の差が広がっているということであった。

ハノイの感想

バリ島や、ネパールから帰ってきたときにも思ったことであるが、高知の町には活気が感じられない。高知龍馬空港から高知市介良の自宅まで人の姿をほとんど見かけない。道路を歩いている人、店の前でたむろしている人、屋外で仕事をしている人がいないのである。自動車は走っているが、

窓を閉め切っているので人の顔が見えない。自動車は信号機に従って整然と、クラクションを鳴らすことなく静かに走っているのである。

ベトナムでは自動車やバイクがクラクションをならしながらけたたましく走り回っている。最初はうるさいが、すぐに慣れる。砂埃が町中に立ちこめて煙っている。その中を荷台に一杯の荷物を積んだ自転車、菅笠を被り天秤棒を担いで荷物を運ぶ人、観光客を乗せたシクロが走り回っている。何もかもが混在し活気に満ちている。

道路沿いの店舗や民家の前では、椅子に座って日向ぼっこをしている人、屋台で食事をしている人、トランプやチェスなどの賭博に夢中になっている人などたくさんの人を見かけた。昔の日本に見られた懐かしい風景である。冷暖房がないので、家の外が最も快適に過ごせる場所なのだろう。

日本のデパートや、スーパーマーケットのような大型店舗はハノイに1店舗ある程度である。高度経済成長がはじまる前の日本のように、小さな個人店舗がほとんどである。一人勝ちするのではなく、共存共栄できる社会の仕組みが保たれているように思えた。

陶芸のバッチャン村やヒューマニティ・センターで働いている若い職人の観光客への対応が親切で、笑顔が実にさわやかである。日本のファーストフード店やコンビニエンス・ストアの店員のようにマニュアル教育がされていないためであろう。

その一方で、郊外には工業団地が建設され、日本から進出した大企業の看板がたくさん見られた。高級住宅が立ち並ぶ団地の開発も行われていた。ベトナムでは共産党一党支配体制が堅持されているが、1986年のドイモイ(ベトナム語で刷新)スローガンによる市場経済主義、開放経済主義政策で急速に経済発展している。この先、ベトナムはどうなるのだろうか。日本のように経済大国になっても弱者を思いやる優しい心が失せ、殺人や自殺が増える方向に向かって突き進んで行かなければ良いのであるが。

(2008年6月8日記)